

第三百四十六回 青葉会

平成二十七年一月二十二日(木) 午後五時半〜八時半 コンチエルト バンケット・ルーム

〈選者〉

☆ 川合万里子 先生(御自宅でリハビリの為、外出されず)

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 福島正明 山崎亜也

〈投句〉

伊賀山そらお 小川恭延 後藤保明 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子
宮内規雄 山内天牛 渡邊盛雄
赤田堅 川口孤舟 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章
村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

七点

☆ 手こずりて読み止(き)したるを読み初めに 恵洲 (万・忠・彦・千・龍・ゆ・灯)

(☆:上五にも「読み」を入れてリズムをとりたい。「手こずりて」↓「読み倦(あぐみ)」)

五点

ひさしぶり賀状相手に会話せり 猛 (堅・彦・敏・隆・正)

他愛なさもめでたさとせん初芝居 恵洲 (堅・孤・龍・く・亜)

(☆:「他愛無い」と「たわいない」を混同しないこと)

☆ ひととせの寿命いただき年新た ゆたか (万・堅・紀・忠・五)

(☆↓一年(ひととせ)の寿命賜り年新た)

白(しろ)えびは軽く揚がりて外は雪 亜也 (猛・忠・彦・弘・青)

人気がなき寺に詣でる寒さかな そらお (堅・龍・ゆ・隆)

(☆:下五で「寒さかな」と纏めてしまうと诗情皆無となってしまうので考慮したい)

玉三郎の舞台稽古指導

☆ 寒紅や若手きたたえる立女形(たてをやま) 紀久男 (万・五・弘・正)

(☆↓鍛(る) (弘:前書不要。下五↓玉三郎)

☆ 子ら帰り年酒の残り一人酌む 忠彦 (万・敏・灯・允)

雲避け芸子が走る上七軒(かみひちけん) 保明 (忠・孤・五・く)

(北野天満宮ちかくの京都で最も古い花街)

(☆:「避け」が少し説明調なので↓「曇るるや」では如何)

新春の駅伝新たな山の神 弘子 (猛・千・龍・敏)

軒深く暮るる山家や雪明り 一灯 (堅・孤・ゆ・允)

(☆:類句に注意。中七↓「暮れゆく山家」)

春菊は欧州原産ソクラテス 正明 (紀・彦・五・隆)

(☆:春菊とソクラテスに共通するのは、地中海地方の産であることと強い香りであろうか)

小吉を是として生くる去年今年 昇 (堅・敏・ゆ・く)

(☆:「大吉」は沢山用いられているが「中吉」「小吉」は辞書に存在しない。何故か?)

☆ 鱒起し黒部の川は北流す 亜也 (万・弘・灯・青)

(☆:中七から下五が説明調なので例えば「鱒起し響く北流黒部川」)

除夜の鐘ローストビーフ焼き上がる 天牛 (隆・允・正・青)

(☆↓焼き上がるローストビーフや除夜の鐘)

☆ ゆつくりは余生の歩巾日脚伸ぶ 盛雄 (万・紀・弘・正)

寒の入り桜さ枝に蕾見ゆ(季重なり) 猛 (千・敏・ゆ)

寒の鯉背中あわせに鎮みをり 全 (五・灯・三)

☆ 大寒の空に念ずる師の快癒 恭延 (万・紀・正)

☆ 雪下し早や三度目と兄の声 忠彦 (万・紀・灯)

老いぬれば家事を分け合ひ輝菓(ひびくすり) 全 (猛・ゆ・青)

(☆↓「老同士分け合ふ家事と餅菓」「輝」はひびではなくあかざれ)

土の香の何から立ちし七日粥 弘子 (彦・亜・青)

(☆↓何かから土の香の立つ七日粥)

☆ 番鳥舞ひてひと声御慶かな ゆたか (万・五・亜)

三点

☆ 雪しまくマタギの腰に熊の皮

一灯 (万・正・く)

(☆↓雪しまきまたぎの↓) (孤:道具立てが揃い過ぎ言いつくされた感あり)

全 (孤・弘・允)

糶られたる鱈ト口箱をはみ出せり

全 (忠・弘・隆)

明日への離陸許可待つ冬の蠅

昇 (千・敏・く)

初富士を愛でて始まる酒の宴

紀久男 (孤・垂)

初芝居劇軽(へうげ)を締(しむ)る大向(おほむかう)

全 (隆・三)

新年会抜けて歌舞伎座立見かな

全 (灯・く)

被災地から一升壇の初荷かな

全 (忠・三)

☆ 初凧や孫と造らん肥後守

全 (万・千)

☆ 青空と白一色の雪景色

恭延 (万・千)

☆ 初笑ひ赤子あやしているうちに

忠彦 (万・猛)

(☆↓鬼は外非力なれども妻守らむ)

健介 (万・青)

語尾伸ばすこれも日本語春隣

全 (紀・龍)

菜の花や静かな海の乱反射

正明 (孤・允)

☆ 鐘撞いて善男善女大晦日

啓子 (万・允)

姫小松手ほどき唄ふ童女かな

亜也 (紀・三)

(☆:一月初の子の日、野辺に出て小松を引き歌を詠むなどの遊びをする) (琴の初弾き)

一点

☆ カラオケの引けたる後の町寒し

そらお (垂)

☆ 元旦や七十年と孫に言ひ

五郎太 (万)

(☆↓元旦や七十回目と孫に言ひ)

全 (猛)

ジャズクラブはや満員なる四日かな

全 (三)

(コットン・クラブ) (☆:「なる」↓「の」)

冬の菊ジュスイシャルリと言ひ淀み

全 (隆)

☆ 初釜や露地で遊べる鳥の影

保明 (万)

☆ 寒の入り琵琶湖藍色深まりぬ

全 (万)

☆ 初詣我が老いを知る人いさくれ

弘子 (垂)

天皇(すめらぎ)の朝や白鳥濠へ出る

全 (紀)

(☆:この「凍る」は緊張や恐怖の表現なので季語にはなし難い)

屠蘇祝ふ家族思ひの父なりき

堂哉 (龍)

初旅や北陸訛のアナウンス

全 (彦)

海老蔵の熱気の余韻初写真(「石川五右衛門」)

ゆたか (紀)

☆ 神鶏の初声燭を揺らしけり

一灯 (万)

(☆:擬人法的に「揺らしけり」と表現しない方が自然。↓「神鶏の初音に燭の揺らぎけり」)

☆ 七種粥肉食系も食しをり

正明 (万)

(☆:下五↓「啜りをり」)

吟じ得ぬままに酒持ち初句会

啓子 (紀)

元旦の今日降る雪のめでたけれ

規雄 (紀)

一夜とか窘(たしな)められて飾り買ふ

亜也 (千)

(☆:門松を大晦日に飾りつける「一夜飾り」は忌むべきこととされている)

城を背の路面電車(トラム)にかかる霰かな(富士)

全 (三)

お年賀と木箱で葉つきのみかん来る

天牛 (紀)

あらたまの夢は虚ろか千秋楽

盛雄 (紀)

●次回青葉会

2月26日(木)

17時30分〜20時30分

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句 ◎先生の米寿と快気祝の句を別に一句

3月26日(木)

17時30分〜20時30分

(丸紅 談話室)

以上 文責 紀久男

一 吉例初芝居総見は正月六日(火)新橋演舞場昼の部(海老蔵の「石川五右衛門」)。初参加の市原弘之さん、橋田一高君含む11名参加。(恭延さん、ゆたかさん夫婦、敏郎さん夫婦、恵洲さん、啓子さん、五郎太さん、小生)。句にありましたように「たわいない」漫画絵草紙。それでも海老蔵フアンの若人らで大入り。はねてから9名が蕎麦屋で歓談(例年有楽町のニュー東京二階「さがみ」なんです。雨の為松屋八階「田中屋」)。海老蔵の指導者不在(團十郎、勘三郎の死と古くからの弟子が廃業。ブレーン不在等)など話題にし乍ら、たつぷり飲んで出ますと雨が上がりつておりました。

二 初句会は正明さんら9出席。投句11名。5時半開始にほぼ揃い、弘子さんからの小川軒(鎌倉)のレーズンクッキー、正明さんの指宿土産・白水館のスイートポテト、忠彦さんから「浦霞・禅」、小生の「半蔵」純米・木桶仕込(伊賀上野)を賞味しつつ芋焼酎「一刻者」などどんどん追加。御覧のように恵洲さんが高得点。先生の米寿と快気祝、イスラム国の人質、陳舜臣の死(「りえぞーん」創刊号に寄稿)、南座顔見世(顔触れと切符代)等々を話題にし乍ら、「萬緑」12月号・1月号の切抜き(眞希子さん・弘子さんの句の合評。新同人眞希子さんの紹介文。小生の初芝居について)、「春野」11月号掲載の允章さんの小春についての解説、伊丹市の「公連協だより」1月15日号掲載のささらぎ句会作品を回覧。

三 関係者近詠

老ゆるほど好きな役者や照紅葉
根より葉のゆたかな大根給料前

眞希子 林檎剥き亡き妻の指思ひけり
全 「NHK俳句」一月号 西村和子選

二晩の留守へ桐の葉一面に
踏む度に匂ふ雨の香冬の芝

弘子 初時雨京の古書店めぐりかな
全 「NHK俳句」二月号 西村和子選

蜜柑剥く岩波の字はみな小さし
青々と牡丹焚火の火の根っこ

青史 秋耕の大地月山までつづき
全 「俳句」一月号 大石悦子選の秀逸

落葉には落葉溜りといふ居場所
一粒の麦ともならで木の葉髪

全 残暑きびし誤算は常に大いなる
全 「俳句」二月号 小笠原利男選

熱爛や蕎麦屋を句座に真砂町
師を見舞ふ小春雑踏吉祥寺

紀久男 富士山を大廻りして神の旅
全 「俳句」二月号 戸恒東人選

いなびかり内定といふ不安定
秋晴や食ひしげる歯と笑ふ歯と

青史 爽漢をおほきく廻す曳つかはせ
全 宰領の一の拍子木秋の天
全 迫り上がる徳川家康天高し
全 手古舞の古き鼻梁や秋祭

「萬緑」 2月号

常連の一人は見えず山眠る
髪染めて動きよき妻初明り

盛雄 星空へ小江戸囃子や秋祭
全 星月夜より逆しまに梯子乗り

一月や無職の吾に予定表
末吉は素晴しきかな初御籤

全 猩猩の赤毛の乱舞川越まつり
全 牛若丸小江戸の秋を練り歩く

控え目の誓ひをしるす初日記
宝恵駕の歩みゆらゆら島田揺れ

健介 興奮の埜塙へ秋の曳つかはせ
全 北浜社「詩歌句」1月号『川越祭り』10句

寒暁や鶏鳴をちこちセブの宿
ひもすがら鴨の鋭き声寒波来る

全 肩甲骨一人ほぐして寒明ける
全 二之席のはねて寒夜の舗道かな

工場の煙まつすぐ冬日和
青空の透けてゐるなり冬桜

全 浅草の若手はつらつ初芝居
全 新春や復帰待たるる三津五郎

雷鳥号比良山系へ冬の虹
初旅の和倉温泉蟹に酔ふ

堂哉 襲名待つ道頓堀の冬燈(ともし)
全 新春や名も改まる鴈治郎

正座して碁盤を拭きぬ春隣

全 大手明男